

英 語

乗 富 智 子

1 英語における「よりよい未来を志向する子」

ICTの発達やSNSの普及により、日本にいながら世界各国の文化に触れることが容易となった。また、金沢にも多くの外国人観光客が訪れるようになり、子どもが外国語に触れる機会も多い。このような社会の中で英語を学ぶことは、自分とは異なる文化や価値観に触れることであり、自分と他者を結び付けるきっかけとなる。多様な文化や他者に触れ、それを理解しようとする、そして相手にも自分を理解してもらおうと働きかけることが、「よりよい未来を志向する」ことにつながる。英語は他者とコミュニケーションを図る力を育む学習である。他者とコミュニケーションを図るためには、自分のことを伝える(Production)だけではなく、お互いが相手のことを理解しようとする(Reception)ことが不可欠である。「よりよい未来を志向する」ためには、この相互理解をめざしたコミュニケーションをくり返し経験していくことが重要であり、英語がその役割を果たしていくことになる。

新学習指導要領では、3・4年生で新たに「外国語活動」が、5・6年生で「外国語科」が導入されることとなり、小学校高学年で教科として英語が学習されることとなった。外国語科の学習では、「外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する」ことが目標とされている。語彙や文法などの知識を個別に身に付けるのではなく、実際のコミュニケーションの中で必要な知識を身に付け、活用し、思考・判断・表現することが求められている。

本校の英語では、英語表現だけでなく、コミュニケーションの内容を重視する。それによって、子どもが目的意識・相手意識をもち「知りたい」という思いをもって聞いたり「伝えたい」という思いをもって話したりできるようにする。聞いて理解することはコミュニケーションの大切な要素であり、聞くことは英語を身に付ける上で不可欠である。教師や友達とやりとりをする中で、たくさんの英語表現を聞いて理解することで子どもが必要な英語表現に気づき、学びながら「わかった」「伝わった」と感じることで授業をめざす。

以上のことから、英語における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・ 目的意識・相手意識をもって コミュニケーションを図ろうとする子
- ・ 教師や友達とのやりとりを通して 伝えたい内容を形成 再構築し 適切な表現を選択・活用できる子
- ・ コミュニケーションの経験を生かし 他者や異文化を理解しようとしたり 自分を理解してもらおうと働きかけたりする子

2 英語における未来へ生かす決める授業デザイン

英語の授業で最も大切にしていることは、単元の学習を通して子どもにどのような姿になってほしいのかを具体的に考えることである。教師が思い描く子どもの姿や学習のねらいに応じてゴールを設定し、子どもが目的意識・相手意識をもって学習に取り組むことができるようにする。見通しをもってゴールに到達するために、学習計画を子どもとともに決める。

英語では、自分が相手に伝えたいこと(内容)をもち、それにふさわしい表現(言葉)を選び、それらを目的に応じてどのように伝えるのか(方略)を考え、表出するというプロセスを経験しながら学習する。教師や友達とのやりとりを通して、子どもが自分の伝えたい内容を深く考えたり、必要な表現に気付いたりし、適切な表現を選択する(決める)ことができるようにする。

子どもはコミュニケーションを図ることで自分のことを伝えると同時に相手の意図や気持ちなどを理解する。このような英語でのコミュニケーションの経験をくり返すことにより、他者との豊かな人間関係を築くことができるようになる。子どもが自分の学びを未来に生かすためには、コミュニケーションの経験を通して学んだことや自分が身に付けた力を認識することが

必要である。そこで毎時間の授業、単元の終末に、それぞれふりかえり・省察の時間を位置付ける。

3 決める授業の手だて

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

子どもが目的意識をもって学ぶためには、子どもの興味・関心を高め、英語でコミュニケーションを図る必要感がある場面や状況を設定することが重要である。子どもにとって必要感のある場面や状況を設定することで、子どもが生活経験、知識、既習表現などを活用し、理解したり表現したりすることができるようにする。

そのために、学習の到達目標となるゴールを設定し、そのゴールに向かってどのような学習をしていくとよいのか、見通しをもたせる。ゴールは子どもの「知りたい」「伝えたい」という思いをもとに設定し、相手意識をもって自己表現できるものとする。ゴールに到達するために、何をしなければならないか、どのような学習が必要かを子どもとともに考え、計画を決めていくことで、子どもが一つ一つの学習に目的意識をもって取り組むことができるようにする。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

コミュニケーションをとるときには、必ず相手が存在する。そして自分が相手に伝えたいこと（内容）がある。相手に内容を理解してもらうためには、どのような言葉を用いるとよいのか、どのように表現するのかといった言葉や方略を工夫しなければならない。

そのために、まずは相手に伝えたいことをはっきりさせ、内容を考える時間を設定する。その際、相手は何を知りたがっているのか、相手はどう考えるかなど、相手意識を明確にもたせることが重要である。さらに、教師や友達とのやりとりを通して、考える視点を広げる。教師が新たな情報を聞かせたり、友達と考えを共有したりすることで、伝えたい内容をもう一度深く考えることができるようにする。

また、自分の伝えたい内容に適した表現を決めるために、たくさんの英語表現に触れさせる。英語は外国語の学習であることから、子どもの語彙には限りがある。子どもが適切な表現を選択・活用していくためには、多様な英語表現に触れていかななければならない。子どもが知りたいと感じたときに教師がモデルを見せ、必要な表現に気付くことができるようにする。また、毎時間の授業で **Teacher talk** を行い、単元で扱う英語表現に関連のある単語や文構造を示す。クイズを出して復習をしたり、メディアに取り上げられている時事を簡単な英語で聞かせたり、季節や行事に合わせた話を聞かせたりなど、単元のゴールに直結しないような表現であっても、意味のある文脈の中で触れることができるようにする。

(3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

毎時間の授業で、自分の学びや他者からの学びをふり返り、ワークシートに記入する時間を設定する。ワークシートには、ねらいに達することができたかを自己評価する部分と、自由記述の部分設ける。自由記述では、できたことやわかったこと、友達や教師の話聞いて考えたこと、これからやってみたいことなどを書く。伝えたい内容を深く考えたことや、伝えるために必要な表現を知ったこと、相手についてよりくわしく理解したことなど、授業の中での学びを自ら認識できるようにする。

各単元や各学期の終末にはこれまでの自分の学びをふり返る、省察の機会を設ける。学習全体をふり返るワークシートを用意し、ゴールに到達することはできたか、見通しをもって学習することができたかを問う。また、単元でどのような力を身に付けたのかを問うことで、自分を客観的にとらえることができるようにする。子どもは単元や学期のはじめにはできなかったことができるようになっていくことを実感し、自分の学びに満足感や達成感を味わうことができるであろう。加えて、単元で身に付けた力が今後の生活においてどのような場面で生かすことができるのかを問うことで、学習したことを活用できる実際のコミュニケーションの場面を考えられるようにする。